

過去生退行催眠療法による症状軽減効果と類似した特徴を示す

自然発生再生型事例

大門正幸

A Spontaneous Case of the Reincarnation Type Showing Characteristics Similar to the Therapeutic Effects Observed in Past-Life Regression Therapy

OHKADO Masayuki

“Past-life” memories are of two types: Memories recalled in past-life hypnotic regression therapy, in which subjects are usually adults, and memories possessed by subjects, usually children, in spontaneous cases which are called cases of the reincarnation type (CORTS) in the literature. One of the important differences between these two types of memories is the status of phobias and other anxieties related to the memories: In the former these problematic symptoms tend to be alleviated by recalling past-life memories whereas in the latter they go hand in hand with past-life memories from the beginning. These differences might suggest differences between these two types of memories in origin. In this article, I would like to report a “mixed” case, in which phobias and other anxieties apparently related to past-life memories of a case of the reincarnation type were alleviated by the subject’s talking about them with her mother.

Keywords: past-life memories, life-between-life memories, womb memories, hypnotic regression therapy, cases of the reincarnation type,

1. はじめに

「過去生」の記憶とされるものには大きく二つの種類がある¹。一つは退行催眠（hypnotic regression）によって誕生より前に年齢を退行させた際に生じるものである²。退行催眠は通常セラピーとして行われるため、当事者はほとんどの場合が成人である。もう一つは、い

¹ Mills & Tucker (2014)を参照。

² 瞑想やEMDRなど、いわゆるスピリチュアル・ヒーリングによっても過去生が想起されることはある。特にEMDRについてはShapiro et al. (eds.), 2007を参照。また、特別な方法ではなく、ある場所を訪問する、縁の人物や物品に接する、といった何らかのきっかけで成人が過去生を思い出すという場合もある。

いわゆる再生型事例 (case of the reincarnation type, CORT) で、子どもが幼少時 (おそらく誕生時) から過去生記憶を保持している場合である。両者には様々な違いがあるが、中でも重要なのは、過去生記憶と関連する恐怖症や嫌悪感と言った否定的な感情の位置づけである。前者の場合、症状の原因を自覚していないクライアントが施術を受け、原因と思われる過去生での出来事を想起することによって症状の改善が生じる。一方、後者の場合には、症状の原因となっている過去生における出来事は最初から明らかである。このような違いから、後者のタイプの過去生事例研究の第一人者である Ian Stevenson 博士は、二つの記憶は性質の異なるものではないかと指摘している (Stevenson, 1994)。

本稿では、幼少の時から過去生記憶を保持しているという点で再生型事例ではあるが、あるきっかけからそれまで内に秘めてきた過去生記憶について語ったことにより、ずっと悩まされてきた恐怖症や不安感が軽減されたという退行催眠による過去生記憶想起に似た特徴を持つ、両者の橋渡しとなるような事例について紹介したい。

2. 退行催眠時に想起される過去生記憶の位置づけ

まず指摘しておかなければならないのが、意識とは何であるのかがよく分かっていない現状において、催眠がいかなる意識状態を生じさせるのかという点について研究者の合意は得られていないという点である。たとえば、*The Oxford Handbook of Hypnosis: Theory, Research and Practice* (Nash & Barnier, 2008)においては、催眠が生じるメカニズムの代表的な説明として解離理論 (dissociation theories) と、社会認知理論 (social cognitive theories) が紹介されているが、どちらがより有力であるかという点についての判断は難しい。また、精神科医の Adam Crabtree (2012) は *Journal of Scientific Exploration* 誌上で催眠を一種のトランスであるとする「新分析」を提出しているが、同誌に掲載された専門家のコメントはいずれも否定的である (Beere, 2012; Cardeña & Terhune, 2012; Tart, 2012)。

このような現状においてその機序は全く不明であるが、催眠によって過去生記憶 (いわゆる前世記憶) が想起されるかのような事例が数多く報告されてきたのは事実である。Perry et al. (1988) によれば、最初に催眠による年齢退行を行ったのは心霊研究にも心血を注いだノーベル賞受賞者の Charles Richet であり、それは 1883 年のことであった。しかしながら、Richet が行った退行は 6 歳までであり、被験者を誕生より前の生にまで退行させた最初の施術者は Albert de Rochas であった (Rochas, 1904, 1911)。続いて Sir Alexander Cannon が *The Power Within* によって 1,000 件もの過去生への退行事例を報告したが (Cannon, 1953)、過去生記憶らしきものを想起させる退行催眠を広く世に知らしめたのは、Morey Bernstein による *The Search for Bridey Murphy* の出版である (Bernstein, 1956)。アメリカ人女性 Virginia Tighe が退行催眠によって縁もゆかりもない 19 世紀のアイランド女性の人生を想起した事例を報告したこの本は瞬く間にベストセラーになり、同名の映画化まで製作された。そしてこれを期に退行催眠が広まり数多くの報告がなされるようになった。

過去生への退行で想起される記憶については、表 1 に示すように、(i) 空想や潜在記憶な

ど、本物の記憶ではないとする立場、(ii) 過去生記憶である、あるいは少なくともその可能性があるとする立場、(iii) 記憶の真偽よりも記憶の想起に伴って生じる治療効果に焦点を当てるべきだとする立場がある³。

表 1：退行催眠で想起される過去生記憶に関する見解

主な立場	提唱者
空想、潜在記憶など、過去生記憶ではない	Baker (1982)、Kline (1956)、Spanos, et al. (1991)、Venn (1986)、Zolik (1958, 1962) など
過去生記憶である、あるいはその可能性を示唆する証拠を提出	Stevenson (1974, 1984)、Whitton and Fisher (1986)、大門 (2011)
記憶の真偽より治療効果が重要	Booth (2007)、Freedman (2007) など

退行催眠時に想起される記憶によってそれまで抱えていた恐怖症などの症状が軽減される事例に関して言えば、一般的には、幼少から過去生記憶を保持している自然発生例 (spontaneous case) とは性質が異なると言わざるを得ない。なぜなら、前述のように、過去生記憶の想起 (保持) が恐怖症の軽減にはつながっていないからである。むしろ、過去生で溺死した場合には水恐怖症、刺殺された場合には刃物に対する恐怖症、といった具合に過去生記憶と連動する恐怖症を有する事例が多く、筆者が報告したあかねちゃんの事例においても、焼死した過去生記憶を持つ当事者には火に対する恐怖症があった (大門, 2012)。また、これらの事例においては、過去生記憶が薄れていくと同時に過去生と関連する恐怖症が消失していくのが一般的なパターンである⁴。本稿で紹介するのは、自然発生事例でありながら、退行催眠事例のように過去生記憶について語ったことが契機となり恐怖症や不安症が軽減されたという興味深い事例である。

3. 事例報告

3.1 当事者

事例の当事者は愛知県在住の姉妹ココちゃんとミミちゃん (いずれも仮名) である。姉のココちゃんは 2001 年 9 月生まれ、妹のミミちゃんは 2007 年生 4 月生まれ。父親の職業はシステム・エンジニア。母親のユキさん (仮名) はいわゆるスピリチュアル・カウンセラーである。母親のユキさんとの電話およびメールを通してのインタビューの後、2015 年 5 月 9 日名古屋に於いて、ココちゃん、ミミちゃん、ユキさんの三人と面談した。この時のココちゃん、ミミちゃんの年齢はそれぞれ 14 歳と 8 歳であった。なお、父親は「スピリ

³ 二つ目の立場については、特に証拠性の高い異言現象 (xenoglossy) を伴う事例を報告しているもののみを挙げた。

⁴ しかし、成人になっても記憶を保持している事例もまれではない。この点については、特に Haraldsson & Abu-Izzeddin (2012) を参照のこと。

チュアルな話」には全く興味を示さないので、姉妹のいずれも本稿で紹介するような内容について父親に語ることはないとのことである。

3.2 過去生記憶

母親のユキさんによれば、ココちゃんは幼少の頃から大人には見えない何かが見えているようであった⁵。たとえば、散歩コースの途中にあった池の横の道を通ると必ず怖がって泣いたり（その池では人が死ぬことが時々あった）、3歳頃には「部屋におじさんがいる」と言い、その後しばらくして「おじさんはいなくなった」と言ったことがあったとのことである。本人によれば、幼少の頃から、周りとの違和感や、不安感、恐怖感、（今から振り返れば）罪の意識を抱いており、また人間ではないものが見えていたとのことである。また暗闇および耳に対する非常な恐怖感があり、後者については鏡で自分の耳を見るのもためられるほどであった。

小学1年生のとき、テレビで「草取りをしていた人が目を掻いたら目がバクテリアに感染した」というニュースを聞き、強い恐怖感を感じて以来眠れなくなり、一週間程、自分の口から髪の毛が出るなどの幻覚が見えた。恐怖心のため、テレビを見ることができず、またユキさんと手をつながないと眠れなくなり、体調を崩して、何度か学校を休んだこともあったという。

その後、持ち直したが、2014年の1月、小学6年生の時、胃腸風邪で2週間ほど欠席をしたことがきっかけとなって人目が怖くなり、学校に行くのが困難になった。最初は保健室登校などで対応していたがそれも難しくなったため、学校側の了解を得て自宅で母親と過ごすようになった。

本人の意識の中には後述のような多くの人物に関する過去生記憶が保持されていたようであるが、「過去生記憶」というスキーマを持たなかったため、本人は、この時点では一種の夢のようなものと認識していた。

2014年3月、12歳6カ月の時に荻久保則男監督による映画『かみさまのやくそく〜胎内記憶を語る子どもたち〜』の予告編で過去生記憶を話す子どもの映像を見て、自分の中にある想いが過去生記憶として捉えられること、そして、必ずしも皆が過去生記憶を持っているわけではないことに気づき、視聴後、母親のユキさんに対して、自分の中にあった20を超える人物の記憶を一気に語った。その時にユキさんが慌てて日記に書き留めた記録をできるだけ忠実に再現したのが表2である。

表2 ココちゃんが12歳6カ月の時に一気に語った過去生記憶

番号	人物（など）	人物に関する記憶
1.	西洋 白人	背が高くてゆびも長い ピアスしてる ゆびがない人に「自

⁵ 子どもが大人には見えない存在を認識すること自体は珍しいことではない。たとえば Taylor (1999) は、彼女が調査した子ども達 152 名のうち 63 パーセントが imaginary companion を持っていたと報告している。

		分は昔注目されてて今はゆびがないからくれ」っていわれて自分のゆびを切ってあげる ふうとうでおくる 絶望している
2.	中国人	車でひかれるところをみる ひきこもる トラックを[に?]のってひいてしまう
3.	バーをけいえいしている人	男の人 目が青い きんぱつ サンドイッチ (パニーニ、ルッコラ) などがある オリーブとかたべもの ←のちに TV でみたことあっておどろく シフトもおぼえてて、具をえらぶならんぞ キレイな街 ヨーロッパ? レンガ茶色 ボローニャ
4.	黒人	女の人 やしの実おちる ←TVでみるまえにしまった 自分もしんだ [落ちて来たやしの実に当たって自分も死んだ]
5.	原始民族	木からおちてしぬ くすりのきのみをとろうとしてしぬ
6.	インドネシア[人]	楽器をつくってる ガムーラン [ガムラン] ←ひいたことある VRT でみたときにはしってた [はじめて VTR で見る前に既に知っていた] バリ島
7.	武士	自害 たたかいからにげて、自殺
8.	文章を書いていた	新しい [時代が] 発明? 発見? ドイツ? みんなにみとめられて、うれしかったのに、すでに他の人がやっていたから悪者になった ダマしたと言われた
9.	金ぱつ 女の子	古い [時代が] おかあさんがびょうき せんそうの中 アメリカ おかあさんだけは平和でいてほしい やけてなくなった中から花をつんでもっていく・・・ばくだん しんだ!? ほうたいまいた女の子?
10.	ミャンマー?	うどんのようなのをこねてて、たたかっていて たべものないけど 自分は世界をすくえんと思っけていたがへビにかまれる
11.	庭師	木をうえる? 自然のことをしている ガーデニング? 「あなたがいてくれなかった」といわれて←子どものころ木と話せる こわがられいじめられしろうと思っけたけど ひいおじいちゃんが木のことをおしえてくれた恩返し ←おかあさんもひていした おじいちゃんがいたからがんばれる ころんでしんだ
12.	ばくだんを作っている	せんそう中 じぶんしか作れる人がいない おじいさん ビンボーな国 イラン 「あなたのおかげで国がたすかります」でも他の国ではうらまれてるんだろうな 右うでをうたれて、もうばくだんをつくるのはやめよう
13.	王のいちばんの遣い	アジア かみは黒 ぎしき よういをしたけどしっぱいして森がもえて王さまがしぬ せきにんをとって自分で自分をもやす あつかった 麻のような服
14.	つりをしていた	おじいさんかおばあさん もうしにそう 「そこでつりをしたらあなたがしんじやう」ばくだんで どく やめて! それをたべたらしぬっていわれて でもたべてしんで、たましいになって空から見て こうかいしている
15.	女の子	地図をかける 天才といわれていた いじめられて、もうか

		かないようにして えんぴつはもたないことにした 学校でも地図をかかなかったから もうあなたはひつようないといわれて学校からとびおる
16.	男	仕事（妻をしばる？）ができなくて、おまえなんていないといわれて木にのぼって手をはなしてしぬ
17.	バーをけいせい	そのうらが家 けっこんきねんぴだからバーをやすんでケーキをつくっていて、たりない食材をかってきて、おくさんがよろこんだ ←あーちゃん[ココちゃんの祖母の名前] ココナツのにおい
18.	料理人	ルッコラ←しってた[見た事もないはずなのに] スープをつくってた 自殺したときは自分を全否定して考えがまわらなかった もういらないと思った
19.	男の人 おじいさん	すごく古い中国 竜←テレビに出たのを見たことがあった の伝説 竜をみたのにしんじてもらえない 昔、本にかいてた
20.	フィリピンの男の人	たたかいがいやだった 友達がダグラスのわるぐちをいっていた マッカーサー←知らない をみて、「この人きらい」と思った なんでかな? と思った イライラする
21.	王女さま	インド? [マスクをした]同じかおが2人いる

ユキさんによれば、この時のココちゃんが記憶を語る様子はまさに堰を切ったようであり、急いで書き留めたものの書き漏らした内容も多いとのことである。また、ココちゃんが記憶を話した時の臨場感や話している時にユキさんの眼前に記憶と関連する映像が浮かんだことから、ユキさんにはとても作り話とは思えなかったとのことである。

表2に記した過去生記憶に関して、興味深い点を二つつ指摘しておきたい。

まず、本人が知らないはずの知識を持っているように思われる部分が散見されることである。たとえば人物3と人物18が料理に使っていたルッコラという食材および人物6が演奏していたガムランという楽器については、記憶を語った時点ではその存在を知らなかったようである。ユキさんとココちゃんが述べるところによれば、それらが実際に存在することを知ったのは、テレビやビデオを通してのことであったという。また、人物3のイタリアの店の様子についても、記憶を語った後にテレビで見たイタリアの店舗と類似していて、ココちゃんもユキさんも驚いたとのことである。さらに、人物20については、過去生記憶を語った時点では嫌いな軍人がいたとしか述べていなかった。ユキさんがヒトラーの写真を見せたが「違う」と言うのでマッカーサー元帥の写真を見せたところ「この人だ!」と反応（写真を見せる時に名前は伝えていない）。ユキさんが「マッカーサーだね?」と確認すると、「違う、ダグラス」との返答。もし通常的手段でマッカーサー元帥のことを知ったとすればこのような返事をするとは考えにくいように思われる。

第二に、ココちゃんが過去生記憶を語った後に当時6歳10カ月のミミちゃんも過去生記憶について語り出し、しかも二人の記憶が合致する部分があった点である。具体的には、ココちゃんが過去生について一気に話した後、ミミちゃんが「自分も覚えている」と言っていて、表3に示す三つの過去生を語ったが、人物1について「お姫様」の話をした時、姉の

ココちゃんがすかさず「あ、それ私！」と声をあげた。

表3 ミミちゃんが6歳10カ月の時に語った過去生記憶

番号	人物（など）	人物に関する記憶
1.	めしつかい	目だけ見えるかぶりものをしていた。同じ格好の人と二人でお姫様を守ってあげていた。
2.	モンゴル人（?）	モンゴルの民族衣装のようなものを着ていた。馬か何かを飼っていたが、山から落ちて死んでしまった。
3.	男の人	門番をしていた。

二人によれば、姉のココちゃんが王女で、二人の召使いのうちの一人が妹のミミちゃんだったとのことである。妹のミミちゃんは、面談時、表3のいずれの記憶についても覚えており、特に姉のココちゃんの記憶と関係する人物1については身振りを交えて明確に語ってくれた。また、過去生記憶との関連は不明だが、風が非常に怖く、風の強い日には外に出られないほどであるとのことである。二人が共通の過去生記憶を持つという点、また人物17の奥さんが現在の祖母だったという記憶は、深い絆に結ばれた魂同士が近い関係を保ちながら何度も転生を繰り返すとされる「ソウルメイト」を彷彿とさせる⁶。

姉のココちゃんの方は、過去生記憶について面談時には詳しいことは忘れてしまっていたが、それでも (i) マッカーサー元帥に対する嫌悪感、(ii) イタリアは居心地のいい場所だったのでもう一度同じ場所に帰りたいという郷愁、(iii) 罪を犯してしまったという罪悪感、そして(iv) 自殺してしまったという罪悪感は現在も残っているとのことであった。また、今でも食べ物に毒を入れて食べさせた夢や、逆に毒の入った食べ物を食べさせられて死んでしまう夢はよく見るとのことであった。また毒、耳、閉所に関しては今も恐怖を感じるとのことであった⁷。

3.3 過去生記憶語りと症状軽減効果

機序は不明であるものの、regression therapy（退行催眠療法、または前世療法）という名前が示唆するように、退行催眠を通して過去生を想起し、それを語ることで不安症や恐怖症といった症状が軽減または消失することは多くの施術者が報告している通りであるが、その一方で、既に述べたように、自然発生的な過去生記憶を語る子ども達の事例においては、記憶の想起は恐怖症などの症状と連動しており、症状を軽減させる効果は見られない⁸。

⁶ 「ソウルメイト」という概念に関する詳細な考察については、飯田(2009)を参照のこと。

⁷ 恐怖症の原因は不明であるが、ココちゃんに戦功の証明として行われた耳削ぎの話をしたら、「あ、それかも（その時の記憶が原因かも）！」という反応が返ってきた。

⁸ 退行催眠による症状の軽減を説明するモデルの一つとして、心的外傷後ストレス障がい(PTSD)の症状の軽減を対象とした Brewin et al. (1996)の分析が参考になるかも知れない。記憶を言語的接近可能記憶 (verbally accessible memory) と状況的接近可能記憶 (situationally accessible memory) に分け、前者の完全な想起が恐怖システム (fear system) の活性化を妨げるとする彼らの分析は、特に語りによって

ところが、ココちゃんの場合には、過去性記憶について一気に語ったことにより、不安感や恐怖感、罪悪感は劇的に軽減し、学校にも通えるようになった。この時の心境の変化について本人は「全部喋ったことで、辛い事を全て吐き出してしまったような感じ」と表現している。またそれ以降は生きることが楽しくなり、面談時も「今は人生がとても楽しい」と語っている。

映画『かみさまとのかみさん〜胎内記憶を語る子どもたち〜』の予告編の視聴が過去生記憶を語り出すきっかけになったのは前述の通りであるが、その後、本編の視聴を通して自分が抱いていた暗闇に対する恐怖症の原因が分かり症状が軽減されたと本人は語っているので、その点について簡単に触れておきたい。

映画の中には子ども達が「反省部屋」の記憶を語る場面がある。反省部屋とは死後に行うとされる人生回顧（life review）において「反省すべきことがある」と自覚した魂が一定の時間を過ごす一種の暗室である。映画の中では、生前自分のことしか考えない生活を送ったために死後誰にも悲しんでもらえなかったという死後の記憶を持つ少女と、自死を選んでしまったという記憶を持つ少年が、新しく人生をやり直す気になるまで過ごした反省部屋の記憶を語る。この場面を見たココちゃんは、自分自身も、幼い頃から「死後、真っ暗な部屋に入って、そこでとても怖かった」という記憶を持っていたため、それが反省部屋だったのではないかと理解し、それが「とても腑に落ちた」、とのことであった。

3.4 胎内記憶・中間生記憶・誕生時記憶・妖精

姉のココちゃんは、2〜3歳くらいの時に、胎内にいた時のことを「外が見えてオレンジ色だった」と語っている。また、やや批判的な様子で「ママ、アイス食べてたでしょ」と語ったことがあるが、妊娠中にアイスを食べお腹を壊したことがあったため、それを聞いた母親のユキさんは大変驚いたという。

また、時期ははっきりしないが、ユキさんとその弟（ココちゃんにとってはおじ）の間に女の赤ん坊が生まれたのを空から見た、と語ったことがあった。ユキさんはその母親（ココちゃんの祖母）に、父親はユキさんの弟（ココちゃんにとってはおじ）にそっくりなので、自分自身の誕生を見たのだろう、とユキさんは解釈している。

誕生時の出来事については、覚えていないとのことである。

妹のミミちゃんは2歳の頃から機嫌のいい時には毎日のように中間生記憶について話していた。内容は「ハートのおうちに住んでいたこと。ピンク色だったこと。生まれる順番を待っていたこと。とても楽しかったこと」で、「ママも連れて行ってあげるからね」と語ったので、中間生記憶に関する知識の無かった当時、ユキさんは「この子は死んでしまうのではないかと不安になったという。3歳を過ぎた頃から自分から語ることはなくなっ

症状が軽減されている点でココちゃんの事例をうまく説明できるように思われる。なお、Brewin (2001) は、Brewin et al. (1996) の分析が神経科学的に裏付けられる可能性を指摘している。また、岐阜聖徳学園大学の林和枝先生からは、ナラティブセラピー的観点からの分析の可能性がある旨、指摘を受けた（私信）。

たのとのであるが、面談時にもこの記憶は残っていた。また、かみさまのような存在がいたかどうかや、現在知っている人がいたかどうかについては、覚えていないとのことであった。ミミちゃんが中間生記憶を語っていたことについては、姉のココちゃんもよく覚えていたが、当時は空想の話だと解釈していたという。

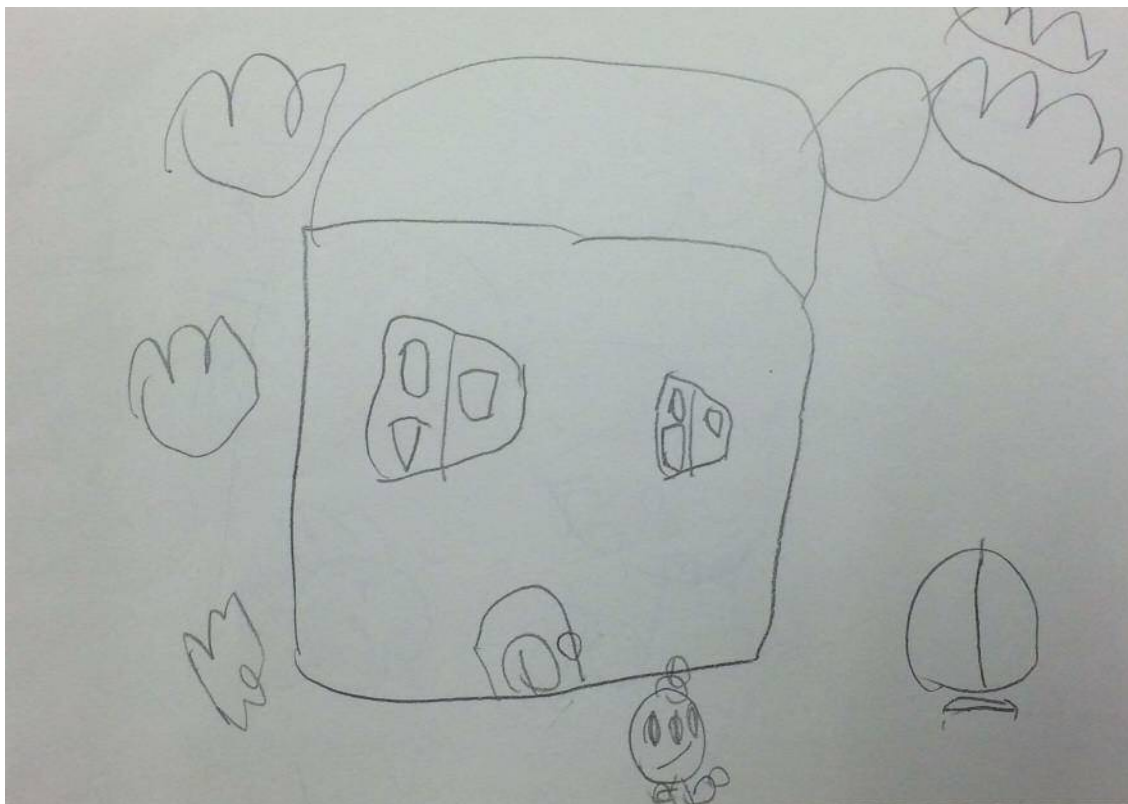


図1 ミミちゃんが描いた、中間生で住んでいたというハートのおうち

胎内記憶と誕生時記憶については、ミミちゃんは語ったことはないとのことである。また、幼い頃から妖精を見ることがあり、面談時においても小学校の校庭などで時折目にすることがあるとのことであった⁹。

3.5 母との絆

母親のユキさんは長女のココちゃん、次女のミミちゃんのいずれとも強い魂の絆を感じているので、そのことについても触れておきたい。

ユキさんによれば、幼少の頃から家族の中にいることにとっても違和感を感じ、生きることが嫌でいつも怒りに満ちていて、物を投げて壊したりすることがよくあったという。4歳で弟が生まれると、負の感情は激しさを増し、押し入れにこもったり、爪を噛み続けたり、食事が取れなくなり栄養失調になって点滴を受けたこともあった。小学校に行き始め

⁹ 注5で述べたように、多くの子供達が imaginary companion を持っている。

たばかりの頃には家の二階から「死んでやる」と飛び降りようとしたことまであったという。しかし、夜眠る前になるといつも「空から伸びて来る手」の存在を感じ、自分が「呼ばれている」、という気持ちになった。その手は長女のココちゃんが誕生してから感じられなくなったため、その手は長女が自分を守ってくれていたのではないかと解釈しているとのことである。

ちなみに、ユキさんはヒーリングを通してではあるが、成人してから中間生のビジョンを見るという経験をしている。それは次のような体験だったという。まず、自分を守護する天使によって天に連れて行かれた。そこはとても幸せな場所だったが、やがて大きな神様の前に連れていかれ、生まれるように言われた。生まれるのが嫌で大泣きしたものの、焼印のようなものを押されて天から落とされてしまった。しかし、地上に降りていく途中に、「役割を果たすためならどんなことでも助けるから」という声を聞き、輝く地球のようなものを見て、生まれることを楽しみにする気持ちになった。それから胎内に宿ったが、母親の不安感を感じ、やはり生まれたくないと思った。ユキさん自身が生まれた時は難産だったとのことである。

また、長女のココちゃんが小学1年生の時に見たテレビのニュースがきっかけで心身の調子を崩したことは前述の通りであるが、実はその日にユキさんは沖縄のチャネラーと会い、自分の過去生に関するビジョンを見ている。その後も自分が過去生に関するビジョンを見た日にココちゃんが心身の不調を訴えることが続いた。面談の少し前にも同じようなことがあったとのことであった。

幼い頃から自分を呼んだ手の存在と、自分が見る過去生のビジョンとココちゃんの心身の不調との連動から、ユキさんはココちゃんとの強い絆を感じているとのことである。

次女のミミちゃんとの関係についても、次のような理由で強い絆を感じているとのことであった。ミミちゃんが生まれる前、流産を体験したユキさんは、何度もその子が帰って来るように祈っていた。水子地蔵の前で願ったとき、自分が空の上とはっきり繋がったという強烈な体験をし、その後にミミちゃんを身籠った。

このように、ユキさんは、長女のココちゃんとも次女のミミちゃんとも、強い「魂の絆」があり、それは二人の誕生より前からのものであると感じている。

4. 結語

以上、本稿では、幼少期より有していた過去生記憶について語ることで記憶と連動していた恐怖症や不安感が軽減されたココちゃんの記憶を中心に、妹のミミちゃんの記憶や、二人の記憶と関連する母親ユキさんの体験について報告した。ココちゃんの事例の特異な点は退行催眠との共通性であるが、ミミちゃんの記憶と重複する部分やユキさんの体験と深く関連する部分があり、個人を超えたより大きな視点から再生型事例を見る重要性を認識させてくれるという点でも大変重要な事例であると言える。今後も様々な視点を視野に入れながら再生型事例について調査・研究を行っていきたい。

謝辞

本研究は中部大学倫理審査委員会の承認を受けて実施したものです（課題名：出生前記憶を語る子どもの実態に関する研究。承認番号：260100）。

本調査に協力してくださったココちゃん、ミミちゃん、お母様のユキさんに厚くお礼申し上げます。また、退行催眠時に想起される過去生記憶に関する議論を通して考察を深めるお手伝いをしてくださった Rhine Research Center の James Matlock 博士、本稿に対して貴重な助言を下された岐阜聖徳学園大学の林和枝先生、認知行動療法的観点から「語り」がもたらす治療効果についてご教示くださった琉球大学の伊藤義徳先生にも感謝申し上げます。

参考文献

- Baker, Robert A. (1982) "The Effect of Suggestion on Past-Lives Regression," *American Journal of Clinical Hypnosis* 25(1), 71-76.
- Beere, Don (2012) "Regarding 'Hypnosis Reconsidered, Resituated, and Redefine': A commentary on Crabtree," *Journal of Scientific Exploration* 26(2), 347-361.
- Bernstein, Morey (1956) *The Search for Bridey Murphy*. Garden City, NY: Doubleday.
- Booth, Richard (2007) "Past Life Narratives as Healing Stories in Psychotherapy," In Stanley Krippner, Michael Bova, Leslie Gray, and Adam Kay (eds.), *Healing Tales: The Narrative Arts in Spiritual Traditions*, 33-51. Charlottesville, VA: Puente.
- Brewin, Chris R. (2001) "A Cognitive Neuroscience Account of Posttraumatic Stress Disorder and Its Treatment," *Behaviour Research and Therapy* 39, 373-393.
- Brewin, Chris R., Tim Dalgleish, and Stephen Joseph (1996) "A Dual Representation Theory of Posttraumatic Stress Disorder," *Psychological Review* 103(4), 670-686.
- Cannon, Alexander (1953) *The Power Within: The Re-Examination of Certain Psychological and Philosophical Concepts in the Light of Recent Investigations and Discoveries*. New York: Dutton.
- Cardeña, Etzel and Devin B. Terhune (2012) "A Proposal That Does Not Advance Our Understanding of Hypnosis: Comments on Crabtree's 'Hypnosis Reconsidered, Resituated, and Redefined,'" *Journal of Scientific Exploration* 26(2), 329-339.
- Crabtree, Adam (2012) "Hypnosis Reconsidered, Resituated, and Redefined," *Journal of Scientific Exploration* 26(2), 297-327.
- Freedman, Thelma (2007) "Once Upon a Time: The Healing Stories of Past Life Therapy," In Stanley Krippner, Michael Bova, Leslie Gray, and Adam Kay (eds.), *Healing Tales: The Narrative Arts in Spiritual Traditions*, 55-66. Charlottesville, VA: Puente.
- Haraldsson, Erlendur and Majd Abu-Izzedin (2012) "Persistence of 'Past-Life' Memories in Adults Who,

- in Their Childhood, Claimed Memories of a Past Life,” *Journal of Nervous and Mental Disease* 200(11), 985-989.
- 飯田史彦 (2005) 『ソウルメイト 「運命の人」 についての 7 つの考察』 東京：PHP 出版.
- Kline, Milton V. (ed.) (1956) *A Scientific Report on “The Search for Bridey Murphy.”* New York: Julian Press.
- Mills, Antonia and Jim B. Tucker (2014) “Past-Life Experiences,” In Etzel Cardeña, Steven Jay Lynn, and Stanley Krippner (eds.) *Varieties of Anomalous Experience*, 303-332. Washington, DC: American Psychological Association.
- Nash, Michael R. and Amanda J. Barnier (eds.) *The Oxford Handbook of Hypnosis: Theory, Research, and Practice*. Oxford: Oxford University Press.
- 大門正幸 (2011) 『スピリチュアリティの研究：異言の分析を通して』 名古屋：風媒社.
- 大門正幸 (2012) 『『過去生記憶』を持つ子供—インド人としての記憶を持つ日本人女兒の事例—』 『人体科学』 21(1), 17-25.
- 荻久保則男監督 (2013) 『かみさまとのやくそく～胎内記憶を語る子どもたち～』 (映画) .
- Perry, Campbell W., Jean-Roch Laurence, Joyce D'Eon, and Beverlea Tallant (1988) “Hypnotic Age Regression Techniques in the Elicitation of Memories: Applied Uses and Abuses.” In Helen M. Pettinati (ed.), *Hypnosis and Memory*, 128-154. New York: Guilford.
- Rochas, Albert de (1904) *Les états profonds de l'hypnose*. Paris: Bibliothèque Chacornac.
- Rochas, Albert de (1911) *Les vies successives, documents pour l'étude de cette question*. Paris: Bibliothèque Chacornac.
- Shapiro, Francine, Florence W. Kaslow, and Louise Maxfield (eds.) (2007) *Handbook of EMDR and Family Therapy Processes*. Hoboken, NJ: Wiley & Sones.
- Spanos, Nicholas P., Evelyn Menary, Natalie J. Gabora, Susan C. Dubreuil, and Bridget Dewhirst (1991) “Secondary Identity Enactments During Hypnotic Past-Life Regression: A Sociocognitive Perspective,” *Journal of Personality and Social Psychology* 61(2), 308-320.
- Stevenson, Ian (1974) *Xenoglossy: A Review and Report of a Case*. Charlottesville, VA: University Press of Virginia.
- Stevenson, Ian (1984) *Unlearned Language: New Studies in Xenoglossy*. Charlottesville, VA: University Press of Virginia.
- Stevenson, Ian (1994) “Guest Commentary: A Case of the Psychotherapist’s Fallacy: Hypnotic Regression to ‘Previous Lives,’” *American Journal of Clinical Hypnosis* 36(3), 188-193.
- Tart, Charles T. (2012) “Regarding ‘Hypnosis Reconsidered, Resituated, and Redefined’: A Commentary on Crabtree,” *Journal of Scientific Exploration* 26(2), 341-345.
- Taylor, Marjorie (1999) *Imaginary Companions and the Children Who Create Them*. Oxford: Oxford University Press.
- Venn, Jonathan (1986) “Hypnosis and the Reincarnation Hypothesis: A Critical Review and Intensive Case Study” *The Journal of the American Society for Psychical Research* 80(4), 409-425.

- Whitton, Joel L. and Joe Fisher (1986) *Life Between Life*. New York: Warner Books.
- Zolik, Edwin S. (1958) "An Experimental Investigation of the Psychodynamic Implications of the Hypnotic 'Previous Existence' Fantasy," *Journal of Clinical Psychology* 14(2), 179-183.
- Zolik, Edwin S. (1962) "'Reincarnation' Phenomena in Hypnotic States," *International Journal of Parapsychology* 4(3), 66-75.